

平成22年度実験展示

さわる 五感の挑戦 PART V

会期 平成22年(2010年)6月12日(土)～7月4日(日)

実験展示の回顧と展望

僕たちの生活は視覚に依拠^{いきよ}しているといわれる。日本語では「見る」「観る」「視る」などの漢字の使い分けがあるし、英語でも「見る」に当たる単語が多数存在する。これは人類が視覚経験を重視してきたことを示す証拠なのではなかろうか。一方、日本語でも英語でも触覚、「さわる」ことに関する表現は貧弱である。吹田市立博物館の5年間にわたる実験展示では、僕たちが日ごろ忘れがちな触文化の楽しさ、豊かさを再認識することによりミュージアムの新たな可能性、ひいては人間が本来持っている「感覚の多様性」を掘り起こすという壮大な目標を掲げてきた。

最近、僕は「見る」と「さわる」の相違に注目し、なぜ今「さわる」ことが万人にとって必要なかを考えている。「見る」の3要素を「さわる」に応用すれば、触文化の意味を探究できるだろう。3要素とは以下の概念



本物の縄文土器にさわる

(2010年1月青森県三内丸山遺跡の収蔵庫にて)

である。「look」は視線を向けて意図的に見ること(→手線を意識し、大きくさわる)。「see」は自然に見える、目に入ること(→皮膚感覚を研ぎ澄まし、全身を手にしてさわる)。「watch」は注意してものの動きをじっと見ること(→一点に指先を集中し、細部を小さくさわる)。これまでの企画展の展示資料の触学方法を分析すれば、たとえば仏像は「look」、和楽器は「see」、玩具や埴輪は「watch」的なさわり方といえよう。もちろん、3要素は常に混在しているので明確に区分できないし、3要素が縦横無尽に交流するのがミュージアムの醍醐味でもある。

僕は便宜上、視覚で事物を認識することを「見る」と表記している。それに対し、視覚を含め全身の感覚を動員して体感する行為を「みる」と定義したい。企画展で「見るようにさわる」「さわるように見る」鑑賞法を鍛えた僕たちは、いよいよ深くて広い「みる」沃野へと分け入ることになる。博物館を「みる」ためのキーワードは「visualize」(思い描く)である。実験展示は今回で終了するが、「みる」ことへのあくなき挑戦、各来館者の創造力と想像力に根ざす「感覚の対話」が2010年、吹田から始まろうとしている！

(広瀬浩二郎・国立民族学博物館)

聞きました！ 実験展示「さわる 五感の挑戦」のおもしろさ

実験展示「さわる 五感の挑戦」展は、展示物にさわることができるという博物館の常識にいとむ企画だったので、試行錯誤の連続で苦しましましたが、当初計画した5年間の目標をようやく果たすことができました。さわる展について、観覧者の立場からの忌憚ない意見を聞くために吹田市内で活動しているボランティアグループのみなさんに小山修三館長がインタビューしました。

さわれる展示の感想は？

小山 これまでの実験展示の感想をお聞かせ下さい。

A 博物館にさわれるものがいっぱい並んでいるのは、すごうれしかったです。とくに最初にあの大きな仏像にさわったときは、たいへん興奮しました。大きすぎて、届かないので横にしてもらったり、学芸員の方も大変だったでしょう。本物の土器にさわれたのもよかったです。

小山 本物はオーラがありますからね、仏像は白鳳時代の聖観音のレプリカですが、精巧なものです。本物には保存という大きな問題があり、それをレプリカで補う方法を考えたいと思っています。

A わたしは絵画にさわりたい、ゴッホなんかいいな。

小山 そりゃ無理でしょう、本物は何億円もしますから。わたしも油絵を描きますが、それでどうでしょう。

A 興味ないわ(笑)

小山 ゴッホのような荒々しい筆致のものは、立体印刷に適していると聞きました。他にピカソの抽象画もおもしろい。絵巻物は絵と文字が混在しているので、さわって味わうのにいいかもしれません。ただ色彩をどう表現すればよいのか・・・。

A 人によって、いつ視力を失ったかによる違いがあります。生まれつき見えない人にも、晴眼者にはわからない「色」の世界があるので、その点はあまり気になさらない方がいいと思います。

小山 絵画は美術館で研究がすすめられているので、今後の展開が期待できそうです。博物館的にはどんなものがあるでしょう。

A はきものや衣装、世界の人々がどんな素材を使っているのか。イヌイットの革のブーツとか、木靴とか。

小山 すいはいくで2005年に特別展をやりましたので、はきものの資料はたくさんあります。みんなくから借りることができます。

A むかしの台所用品もおもしろいでしょうね。生活の変化を実感する。

小山 めいもの、洗濯、子どもの遊び、家庭から手を使うものがどんどんなくなっています。その再評価にもつながりすね。

A 他にもさまざまな世界の民族の楽器にさわって、鳴らしてみたいです。



昨年は香りをとりあげ、香道の体験講座を実施した。
(2009年9月)



小学校の福祉教育でのギター演奏
(2009年3月)

参加する楽しみ

ー音楽会、スポーツ大会、おでかけイベント

小山 音楽は、演奏つまりイベントにつながっていきますね。辻井伸行さんのように活躍している音楽家はたくさんいますね。

A 吹田にもたくさんいますよ。シンセサイザー、ピアノ、ギター、笛。そうだ、晴眼者とコラボして、博物館でみんなが楽しめる音楽会ができるといいですね。

小山 他にスポーツがありますね。パラリンピックのテレビを見ていて、その迫力に圧倒されました。みなさん、けっこうスポーツ好きなのですね。

A わたしは、からだを動かすのが大好きです。得意種目はサウンド・テーブル・テニス(視覚障がい者の卓球)。大会にもよく出場します。このあいだは、中学校の卓球クラブの生徒に勝ちました。

小山 そういえばNさんは、最近、泉州国際市民マラソンで優勝してメダルを取ったと聞きました。

A あの人のスタートダッシュはすごいそうです。一流です。

小山 デモンストレーションで走ってもらいたいなあ。博物館でスポーツイベントができるといいですね。

A ほかに、おでかけイベントで行った、^{おたぎ}愛宕念仏寺が印象深かったです。石仏にさわれたのもよかったけれど、それ以上に周りの自然がすばらしかった。風とか、木の香りとかを感じることができて、いやされました。



愛宕念仏寺見学会(2009年9月)

パソコンが時代をかえた

小山 さわる、きく、かぐなどの体感的なもののほかに、視覚障がい者の情報処理について大変興味があります。記録し伝える世界のことです。

A はじめは通常の文字を凹凸化したものでした。その後、表音式の仮名点字が発明され、手と耳によるコミュニケーションが重視されるようになりました。最近ではパソコンの音声処理が発達しています。携帯メールを使う人も増えました。メールが届いたら、それをすぐに音声で確認できるので、たいへん重宝しています。(ケータイを取り出す)

小山 ほお、すごいなー。しかし一方で、これまでの点字が使われなくなるのではないかという心配もあるそうですね。とくに点字教育について、政府はボランティア任せで無責任だという批判をきいたことがあります。

A 点字はじっくりものを考えるという意味で、わたしたちにとって欠かせない文字だと思います。従来の手書き用の点字版の他に、点字プリンターや立体プリンターなども比較的簡単に利用できるようになりました。携帯をはじめ、わたしたちがどうやって連絡を取り合っているか、コミュニケーションの歴史と現状がわかる展示をやればおもしろいでしょうね。

小山 広瀬さんは、さわることは一つの文化である、そのひろがり喜びをみんなに伝えたいと言っています。

A それは同感です。博物館が、みんなが楽しめる場所であることがわかったのが収穫ですね。

小山 本日はどうもありがとうございました。



土鈴づくりに挑戦(2009年10月)

さわって



いす
ガーナ



小学校のいす
日本



いす
ブラジル



ゲベタ(ゲーム)
エチオピア



まり
日本



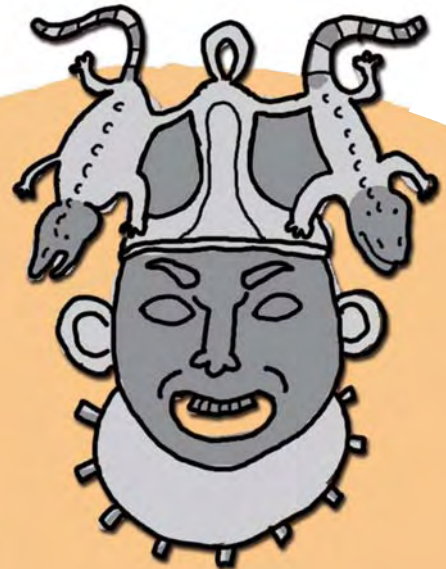
フクロウ人形
ミャンマー



はしで降り
日本



お面(きつね)
日本



仮面(ワニ付き)
カメルーン



お面(ひょっとこ)
日本



サリー
インド



イヌイットの冬服と靴
カナダ

楽しむ



マサラ
日本

筑前琵琶
日本

グイロ
エチオピア



アツェラ(道化師の仮面)
ブータン



水鳥(土鈴)



猿(土鈴)

この実験展示では、展示資料をケースの外に置き、さわったり、においを嗅いだり、音を聴いたり、視覚以外の感覚も使って鑑賞する「五感の挑戦」をテーマとして掲げました。五感を駆使してモノ（資料）に接すると、見るだけでは得られなかった様々な情報があることに気づきます。

平成18年度の開始以来、玩具、楽器、仏像レプリカを展示し、平成20年度より縄文土器や埴輪などの考古遺物（レプリカ）を追加してきましたが、今年度は国立民族学博物館の協力を得て、民族衣装やその他の民族資料を加え、日本のモノだけでなく、海外のモノをさわって鑑賞・比較できるようにしました。

また、昨年開催したワークショップで、視覚障がい者の方々が制作した土鈴も鑑賞していただきたいと思います。視覚に頼っている健常者は、これらの作品を通じて、人間の手の力、触覚の可能性を再認識することでしょう。

(池田直子・吹田市立博物館)



さわれる世界の博物館

モトモト博物館（ザンビア）

モトモト博物館でテクテク体験



展示室のガラスケースと露出展示

ザンビアの北部ンバラにモトモト博物館があります。ここでは、ほとんどの展示物がガラスケースの中に展示されています。展示物をさわろうと手を伸ばすと、ガラスにぶつかり展示物ではなくガラスをツルツルとさわることになる訳です。

でも、展示計画の不備で予定通りケースに収まらなかったり、予算不足のためケースが足りないなどといった理由で、棚や床にそのまま展示されることも

あります。

学芸員はさわってはいけないという姿勢ですが、展示解説員はその認識が薄い人もおり、さわっていると学芸員に注意されることがあります。また、館内を見回る展示解説員の数が足りない時は、来館者がさわり放題という場面にも遭遇^{そうぐう}します。学芸員が気付けば注意しに行くといった具合です。

ただ、学芸員によると女の子のための伝統的な儀式用の土器を地元の村に貸し出し、実際に儀式で使われたことはあるようです。

決して恵まれた環境ではない中で、真剣に博物館が運営されているモトモト博物館。ここでは、来館者がみずからの足で博物館を訪問し、展示室を足の皮膚感覚を使ってテクテク回るという行為が、ハンズオンに匹敵する主体的な学習行動といえるのかもしれない。

（五月女賢司・国立民族学博物館）

メトロポリタン美術館（アメリカ）

さわって描こう！



展示室で、触知可能な教材を指でなぞる参加者

ニューヨーク市にあるメトロポリタン美術館の、視覚に障がいを持つ人向けの月1回の素描プログラムは、ユニークで好評です。

まず、アトリエでのウォーミング・アップで、参加者は、自分の腕・肩・頭をさわリ、木炭でわら半紙に描いたり、ちぎり絵を作ります。

次に、展示室で、古今東西の展示物から、毎回違

う美術作品を鑑賞^{かんしょう}します。本年2月は、インド美術で、仏像絵画に似た、A4版ほどのジャイナ教の祖師坐像図でした。祖師の姿勢や指のジェスチャー、顔の表情などをインストラクターが解説していく間、小さな仏像彫刻や、触知可能な教材（祖師の輪郭線を出っ張った線で表し、さわって図像理解に役立てる画像。写真参照）が、回されました。最後に展示室内で、各自、祖師図の印象を、白い画用紙のちぎり絵にしました。

アトリエに戻り、各自、祖師図のちぎり絵を青い画用紙に貼り、パステルなどで描き加えて完成させ、最後に皆で話し合いました。

毎回、さわれる材料（布、レースなど）や技法（貼り絵など）を用いて、視覚に障がいを持つ人が、制作過程や完成作品を理解しやすいよう工夫しています。参加者の多くは、毎月仲間と一緒に学べる美術鑑賞・制作の機会を楽しみにしています。

（大高 幸・慶應義塾大学）

ギャラリー「ウリドゥレヌン」(韓国)



陶片の埋め込まれた石壁

ソウルの中心、おしゃれなギャラリーやカフェの並ぶ三清洞^{サムチョンドン}の静かな路地に入ると、ギャラリー「ウリドゥレヌン」があります。「私たちの目」を意味する韓国語で、視覚障がいを持つ子どもたちの造形作品を常設展示しています。自身もアーティストであり、盲学校の美術教育推進に携わるオム・ジョンスンさんが、活動の一環として設立しました。

つくってさわる

このギャラリーの前の道には、楽しい仕掛けが施されています。思い思いの形に作られ、色とりどりの釉薬^{ゆうやく}を塗られた陶片^{とうへん}が、向かいの石の塀に埋め込まれているのです。目の見えない子どもたちの作品です。

ギャラリーの中から観察していると、道行く人がかなりの頻度^{ひんど}で、この壁の前に立ち止まり、さわり始めます。片手だけでちょこっとさわっていたのが、やがて両手も使い出す人、一緒にいる人と、さわりながら会話を始める人。それぞれのさわる手ごたえを楽しんでいるようです。わたしが訪ねた時は、冷たい雨が降る秋の夕方でしたが、ひんやりと濡^ぬれた陶の手ざわりは心地よいものでした。屋外に置かれた作品の感触は、季節や時刻によっても変わるのでしょう。

そぞろ歩きを楽しみながら、作る楽しさの追体験、さわる醍醐味^{だいごみ}を、季節の空気と一緒に味わうことのできる作品です。

(真下弥生・ルーテル学院大学)

美濃加茂市民ミュージアム(日本)



クワの手ざわりを確かめあう(小学校2年生)

岐阜県にある美濃加茂市民ミュージアムは、木曾川をみおろす丘の上にある総合博物館です。9ヘクタールの敷地には、里山として古くから大切に残されてきた森があり、そのたたずまいを体感できることから、樹木や野草、鳥たちとも気軽に親しみ、出会えるような機会を大切にしています。

自然を楽しむ

2月、子どもたちと一緒に冬の森を歩いてみました。息を吸ってみると、「はりつめた」空気の冷たさを感じます。みんなで落ち葉をふみしめる時には「かさかさ」と音がして、地面のやわらかさも伝わってきました。葉を落とした樹木たちは、春に芽吹く冬芽^{とうが}を冬の寒さから守っています。アカメガシワの毛などにやさしくふれてみると、大事に包み込まれている様子がわかりました。クワ(桑)の樹皮をさわった時には、ツルツルした手ざわりを自分の言葉で話してくれました。子どもたちは、感触をくらべていくことで、違いを気づくようになってきました。

自然観察、野草やキノコを食べるなど、ミュージアムの素材を通じた体験的な活動から、自分の身体をつかって、身近な自然と人とのつながりを感じとる「きっかけ」をつくりだしていきたいと考えています。

(藤村 俊・美濃加茂市民ミュージアム)

あそびにきてね！

実験展示「さわる 五感の挑戦 PART V」の催し物

■コンサート・演奏会

6月13日(日)午後2時～3時30分

「♪梅雨を吹き飛ばせ！ジョイントコンサート♪」

ギター演奏 秋田克英氏・福田由紀雄氏

ギターをこよなく愛する二人が梅雨の晴れ間のように心弾む演奏をします。聴いて、歌って、一緒に楽しい時間を過ごしませんか。

開催場所／吹田市立博物館講座室

定員／120名(先着順)

6月19日(土)午前10時30分～11時30分

和太鼓演奏会「心に響くふるさとの音」

演奏／郷土サークル 野火

開催場所／吹田市立博物館 3階外広場

■講演会

6月20日(日)午後2時～3時30分

歴史講座「琵琶法師と当道」

講師 当館学芸員 池田直子

7月4日(日)午後2時～3時30分

「万人のための“点字力”入門

ー創って使って伝える触覚文字の歴史ー」

講師 国立民族学博物館准教授 広瀬浩二郎氏

いずれも開催場所／吹田市立博物館講座室

定員／120名(先着順)

■開館時間／午前9時30分～午後5時15分

■休館日／月曜日

■観覧料／大人200円(160円) 高・大学生100円(80円)
小・中学生50円(40円) * ()内は20名以上の団体割引料金 * 毎週土曜日は市内小・中学生は無料(土曜日以外もぐるっとすいたカードをもってくと無料)

■すいはくURL <http://www.suita.ed.jp/hak/>

■ワクワク体験

7月3日(土) 午後1時30分～4時

協力 点訳の会「円」

開催場所 博物館3階ロビー・外広場

☆聴いて、触って体験してみよう！☆

自分の中の感覚を研ぎ澄ませて、視覚に頼らない世界をあなたも体験してみませんか。

★サウンドテーブルテニス(視覚障がい者の卓球)

指導 藤原栄子氏

耳でボールの位置を確認し、ラリーを楽しみます。あなたも勝負してみませんか。

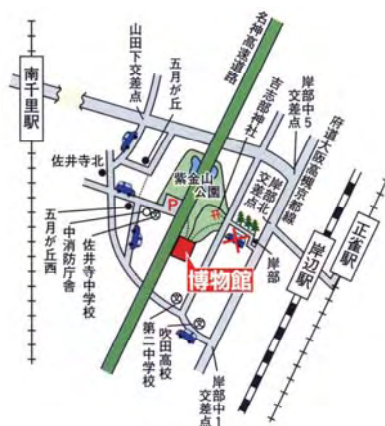
★音声パソコン操作 指導 宮原晶子氏

しゃべるパソコンや携帯を知っていますか。視覚障がい者の方が利用しているパソコンや携帯の操作を実演します。

★点字名刺作り

★お宝探しゲーム

アイマスクをつけて手探りでお宝探しをします。



編集後記 この実験展は5回目となる今年で終わる。振り返れば、試行錯誤の連続だったが、それは展示物をケースにとじこめ、来館者の便宜よりも資料を守ることを旨とする従来の博物館に対し、「さわる」ことを正面にとりあげチャレンジしたからである。各方面からさまざまのご意見をいただいたが、なかでも老人養護施設からの「ひじょうに楽しかった」という声には驚くとともに強い励ましをうけた。「みる」だけでなく「五感」で感じることの大切さは、いま世界の博物館が体験型へと変わっている趨勢とも連動している。アドバイザーをお願いした広瀬さんは「ユニバーサル・ミュージアム、誰もが楽しめる博物館」プロジェクトを文科省の科研費を受けて立ちあげ、昨年から活動を始めている。これは、この企画の成果の1つであり、未来の博物館づくりへの新たな一歩となるものと期待している。

最後になるが、この展示では、吹田視覚障害者福祉会、点訳の会「円」、音訳グループ「とも」、吹田市社会福祉協議会、企画集団ぷりずむ、国立民族学博物館に大変お世話になった。記して感謝申し上げる。(小山修三)

吹田市立博物館だより 第42号 平成22年(2010年)6月3日発行

発行 吹田市立博物館 〒564-0001 吹田市岸部北4丁目10番1号 TEL. 06 (6338) 5500 FAX. 06 (6338) 9886

編集委員: 広瀬浩二郎、五月女賢司、藤田京子、池田直子、小山修三

■この冊子は、3,500部制作し、1部あたりの単価は34円です。各ページ数は算用数字とともに点字でも表記しています。